The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	平安朝詩文の「俗語」
Author(s)	後藤, 昭雄
Citation	語文. 1987, 48, p. 9-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68753
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

平安朝詩文の「俗語」

後藤昭雄

はじめに

平安朝の詩人たちは、中国における口語的語彙、いわゆる「俗語」も、その詩嚢の中に取り込んでいる。それら平安朝詩に用いられた俗語について、これまで積極的に発言してこられたのは小島憲之氏[1]で、その著書、論文における論及のほか、直接の専論もあり[2]、それらの中で多くの言葉が取り上げられてきた。また他の先学による考察、言及もある[3]。

しかし、これまでに取り上げられた言葉は、全体の一部にしか過ぎず、なお多くが残されている。これまでの論及は、時代的にいえば、十世紀の初頭、菅原道真の時代までに限られ、以後の詩については全く手つかずの状態に置かれているが、その道真の周辺までに限っても、なお取り上げるべき言葉は少なくない。そこで、一応平安初頭期から十世紀初めまでで区切って、その時代の詩に用いられた俗語のいくつかについて考えてみたい。ただし、『新撰万葉集』中の詩は、多くの俗語を含んではいるが、その作者も、制作年代も明確ではないので、いまは除外した。

なお、詩語と散文語との相違にも留意すべきこと、先学の注意されるところであるが[4]、いまは詩に用いられた言葉であれば、同語の散文の用例も援用した。

当家

『菅家文草』巻一に「観二王度園碁、献二呈人一」という詩がある。

一死一生争道頻　　一(あるひ)は死一は生　道を争ふこと頻りなり
手談厭却口談人　　手談厭却す口談の人
殷勤不愧相嘲哢　　殷勤に愧せず相嘲哢し
漫説当家有積薪　　漫(みだ)りに説く当家に積薪有りと

結句に「世に大唐の王積薪の碁経一巻有り。故に云ふ」の自注がある。

結句について、日本古典文学大系本の頭注に、「私の家には先祖の王氏の碁の虎の巻があるのだからねとすずろに言いちらしたりする。『当家』は、日本語」という注が付けられている。句の解釈はおおむね妥当であるが、「当家」は日本語、というのは誤っている。これは道真の誤用すなわち和習ではない。

この語は漢語であり、『詩詞曲語辞匯釈』（巻六）『敦煌変文字義通釈』両著に採録する。そうしてその意味を『匯釈』は「猶云本家、或自家」、また『通釈』は「本家、自己家裏的、同姓」という。たとえば『通釈』では『搜神記』「田崑崙」条の

当家地内、有一水池、極深清妙

の例をあげ、

天女称崑崙為池主、可見水池是崑崙家裏所有的

と説明している。すなわち、「当家」は、「その家」あるいは「この家」、また「うちの」という意味である。

この詩の場合は「うちの」という意味になるが、それとともに「同姓」ということでもある。これは『匯釈』の説明の方がわかりやすい。『匯釈』には唐詩から二例が引かれているが、その一つは白居易の詩である。次のようにいう。

白居易贈楚州郭使君詩『当家美事堆身上、何啻林宗与細侯』此亦猶云本家、以用郭姓典故也。

説明を補うと、白居易の「贈二楚州郭使君一」に、

当家美事堆身上　当家の美事身上に堆し
何啻林宗与細侯　何ぞ啻林宗と細侯とのみならんや

の一聯があり、ここに「当家」の語が用いられているが、それは郭氏に贈った詩に因んで、「同姓」の郭氏の典故を持ち出したことによる。林宗は後漢の郭泰、都洛陽に遊び、のち郷里に帰る時には、諸儒の見送る車が千乗もあったが、林宗はひとり李膺とのみ舟に乗って河を渡った。人々はこれを見て神仙だと言い合ったという。細侯もやはり後漢の人、郭伋である。彼は循吏として名高く、并州の長官となって再度赴任した時には、老若が歓迎し、児童数百人が竹馬に乗って迎えたという。詩は、この典故を踏まえて、郭家に関わる美事は何も昔のそうした人々には限らない、いま楚州使君となって下る郭氏にもそうした美事は多いのだ、という意味である。もちろん後漢の郭氏と楚州使君の郭氏とに系譜上のつながりがある必要などはない。ユーモアである。

道真の詩も同じ構造を持つ。碁を囲んでいるのが王度だから、同じ王姓の碁の神様王積薪を持ち出したのである。この場合も両者には直接のつながりはない。ないにもかかわらず、王積薪を持ち出したから、「漫りに説く」というのである。

『菅家文草』にはもう一つ「当家」の例がある。「絶句十首、賀二諸進士及第一」の第三首（巻二）に、

当家好爵有二遺塵一、不レ若槐林苦出身

の一聯がある。この詩には「橘風を賀す」の注記がある。学生の橘某の文章生及第を祝うものであるから、ここでの「当家」は、「この家」あるいは「その家」の意味である。

耶孃

「耶」は「爺」とも表記されるが、父を、「孃」は「娘」と表記されることもあるが、母をいう俗語である。「おやじ」「おふくろ」ということになろう。唐詩に次の例がある。

箇箇惜二妻児一、爺娘不二供養一（寒山、我見世間人）
我住在二村郷一、無レ爺亦無レ孃（寒山、我住在村郷）
耶孃妻子走相迷、塵埃不レ見咸陽橋（杜甫、兵車行）[5]
村南村北哭声哀、児別二爺孃一夫別レ妻（白居易、新豊折臂翁）

平安朝詩では、『文華秀麗集』に用例がある。

独頼二耶孃偏愛重一、何図見者以二為神一（菅原清公、奉和春閨怨、巻中）

そうして六朝以来の俗語であること、前掲の杜詩の例ほかをあげつつ、小島憲之氏の指摘がすでにある。[6]

『文華秀麗集』にはこの一例のみであるが、この語は空海の詩文に多くの用例がある。そのうちのいくつかをあげよう。

天子剃レ頭献二仏駄一、耶嬢割レ愛奉二能仁一（山中有二何楽一、『性霊集』巻一）

伏惟、先師徳下、……、群品之耶嬢、一人之帰馮。況復覆レ我如レ天、載レ我如レ地、撫レ我若レ嬢、提レ我若レ父（為二先師一講二釈梵網経一表白、巻八）

伏惟、我皇帝陛下、……、三界之耶嬢、万方之嬢（和尚奉二為祈二皇帝一転二読大般若経一願文、巻八）

唐矣三尊、耶嬢六趣（被レ修二公家仁王講一表白、巻八）

箇（个）

『詩人玉屑』巻六に、杜甫の詩における俗語の使用について、次のような論述が見える。

数レ物以レ个、謂レ食為レ喫、其近二鄙俗一。独杜子美善用レ之。云、

峡口驚猿聞一个、両个黄鸝鳴翠柳、却遶井桐添个个、（後略）

助数詞としての「个（箇）」を、ものを食う意の「喫」とともに、杜甫がよく用いた俗語として指摘しているが、この、現代中国語もそうである助数詞の「箇」は平安朝詩でも用いられている。

まず、人を数えるのに用いた例。その用例をあげる前に、前引の杜詩はいずれも物を数えるのに用いた場合であるから、塩見邦彦氏の指摘(7)を借用して、唐詩のその一、二をあげておこう。

已聞城上三更鼓、不レ見心中一箇人（元稹、新政県）

不レ知玉質双棲処、両箇仙人是阿誰（貫休、寄二鄭道士二首）

本朝では平安初期から用例がある。

千人万人挙不レ応、唯君一箇帝心抽（贈二野陸州一歌、『性霊集』巻一）

吾有二一箇瓊枝一、不幸先レ露（為二酒人内公主一遺言、『性霊集』巻四）

「瓊枝」は玉の枝、ここでは酒人内親王の皇子をいう。

在二辺亭一賦得二山花一。戯寄二両箇領客使并滋三一（王孝廉、『文華秀麗集』巻上）

これは詩題である。

吾告二式部卿大蔵卿安勅三箇親王一也（為二酒人内公主一遺言、『性霊集』巻四）

下って延喜期に一例がある。

一院群居人七个、疑従二天上一斗星投（三統理平、秋日陪二左丞相城南水石亭一祝二蔵外史大夫七旬之秋一、『雑言奉和』）

次に、ものを数えるのに用いた例であるが、これは詩序の中ではあるが、早く『懐風藻』に用例があるので、挙げておこう。

待二君千里之駕一、于レ今三年、懸二我一箇之榻一、於レ是九秋（藤原宇合、在二常陸一贈二倭判官留在レ京）

以下、平安朝詩の例。

一箇無明諸行業、不レ中不レ外惑二凡情一（詠十喩詩、『続性霊集補闕鈔』巻十）

比来朔雁度千番、一箇封書未二曾看一（巨勢識人、和二伴姫秋夜閨情一、『文華秀麗集』巻中）

試賦二臨年蕚一、仙齢幾箇迎（賀陽豊年、詠桜、『経国集』巻十一）

歳中翫レ菊過レ秋深、百箇花前久陸沈（侍中局賦二秋陽曝二菊花一、『田氏家集』巻中）

『菅家文草』には五例があるが、いまは一つにとどめておこう。

点検窓頭数箇梅、花時不レ記幾年開（書斎雨日独対梅花、巻一）

都盧

豊田穣「唐詩俗語攷」(『唐詩研究』)に採録されていて、その「葛原詩話」(巻三)では「都来」と同じく「スベテトイフコト」となしてゐるのが、当つてゐると思ふ。「都盧」の盧は「都来」の来と同じく単に語尾に添えられただけの助辞であって、一音節でいへば「都」であり、二音節にのばしていへば「都盧」になる。

という説明が、よくこの語の意義を説いている。『遊仙窟』に二つの用例がある。

遮レ三不レ得レ一、員レ両都盧失
触処尋二芳樹一、都慮少二物華一

白居易の詩にも見える。

骨肉都盧無二十口一 糧儲依約有二三年一

『葛原詩話』には、「旧訳ノ般若経ノ内、処々ニ都盧ト云字アリ」とも述べている。私の調査はそこまで及んでいないが、漢訳仏典に口語が多く用いられていることは周知のことである。

我が国では『新撰字鏡』巻十二(二六オ)に「都盧同上」とあり、「同上」は直前の「総豈」に付された訓み「志加之奈加良」を承けるが、この「シカシナガラ」は、逆接の接続詞のそれではなく、「すべて」の意である。

詩文では、早くは菅原道真の文章に用例がある。

一つに「鴻臚贈答詩序」(『菅家文草』巻七)に、

二大夫、両典客、与二客徒一相贈答同和之作、首尾五十八首。更加二江郎中一篇一、都慮五十九首。

また道真が父是善の命に従って作った『文徳実録』の序文に、

起レ自二嘉祥三年三月己亥一、訖二于天安二年八月乙卯一、都盧九年。勤成二十巻。

とある。後者について言えば、この部分に当たる所が、他の正史では、

起二于天長十年二月乙酉一、訖二于嘉祥三年三月己亥一、惣十八年。拠二春秋之正体一、聯二甲子一以詮次。考以二始終一、分二其首尾一、都為二廿巻一。(続日本後紀序)

起二於天安二年八月乙卯一、訖二于仁和三年八月丁卯一、首尾三十年、都為二五十巻一。(三代実録序)

と、「惣」「都」と一字で書かれていることは、「盧」は接尾辞であって、一音節でいえば「都」、二音節にのばして「都盧」となるという、前引の「唐詩俗語攷」の説明の正しさを証明するものである。

ついでにいえば、勅撰の正史の序文という、撰者の上首である右大臣藤原基経が陽成天皇に奏上するという体裁をもつ、最も折目正しいものであるはずの文章の中に、道真はこのような口語的語彙を取り込んでいるわけである。

他に、同時代の三統理平に、

幾許群臣呈二露胆一、都盧万物照二秋毫一(霽色明二遠空一、『類聚句題抄』)

があり、時代が下って、大江匡衡の詩序に、

左親衛藤中郎将、……、及朝士大夫、夕拝侍中、都慮十有余人、会二合于藤亜相別業一矣。(夏日陪二藤亜相城北山荘一同賦淡交唯対レ水詩序、『江吏部集』上)

大江匡房に、

五畿及七道、毎レ国祭祀祗、都盧四海内、争不レ仰二指揣一(参安楽寺詩、『本朝続文粋』巻一)

などの例がある。(8)

一種

『詩詞曲語辞匯釈』に、

猶云一様、或同是也。

とある。「同じ」「同様の」の意で用いられる。李白、杜甫以下多くの例が引掲されているが、その一、二をあげると、

一種為二人妻一、独自多二悲恬一（李白、江夏行）

一種愛二魚心各異一、我来施レ食爾垂レ鉤（白居易、観遊魚詩）

我が国では、平安初頭詩にすでに見える。『経国集』に、

忽見三春木、芳花一種催（高村田使、奉和殿前梅花、巻十一）

九區千万里、一種色皚皚（金雄津、詠雪、巻十三）

『性霊集』に、

夏月涼風、冬天淵風、一種之気、嗔喜不レ同（徒懐玉、巻一）

一種阿字多旋転、無辺法義因レ茲宣（詠十喩詩、巻十）

『雑言奉和』に、

只為二芬芳一近レ仙看、万樹栄暉一種同（坂田永河、奉レ和二聖製河上落花詞一）

また、菅原道真の周囲においても、『菅家文草』に六例、嶋田忠臣の『田氏家集』に三例、『雑言奉和』に二例があるが、いまは道真と忠臣の詩一例ずつをあげておこう。

山郵水駅思紛紛、一種風光両処分（喜二田少府罷レ官帰京一、巻二）

数十名駒一種良、恩頒近侍雁成レ行（和下高侍中鎮夷府貢二良馬数十疋一、有レ勅頒賜、偶題中長句上、巻上）

以上の諸例、いずれも「同じ」あるいは「同じように」と解すべきものである。

除非

『文語解』に、

俚語ノコレハカクベツト云意ナリ、コノ義ヨリシテ、タダト訳スベキ所オオシ

と述べている。『詩詞曲語辞匯釈』（巻四）にも、

仮設一例外以見其只有此也。

と説明されている。「ただ……だけ」の意である。そこに挙げられているのは宋以後のものであるが、塩見氏は早く唐詩の例を指摘されている。白居易詩にも用例がある。(9)

除非奉二朝謁一、此外無二別牽一（朝帰書寄二天八一）

除非一杯酒、何物更関レ身（感春）

我が国の詩では、わずかに『田氏家集』に次の例がある。

除非鮮服随鱸膾　除非鮮服に鱸膾を随ふるのみ

自外紛紛俗納牽　自外は紛紛として俗納に牽かる

（奉レ和下大相立秋日感二涼風至一詩上、巻中）

何物

この語については、吉川幸次郎氏に説がある。すなわち、現代中国語では、「なに」と尋ねる時に、「甚麼」ということばが普通に用いられるが、その前身に当たるものが、「何物」である。「『何物』というういい方は、一見、『なにもの』を意味するように見えるが、そうではない。『なにもの』ではなくして、ただの『なに』なのである。……、『物』は軽くそわるだけであって、『物』の字がほかの場合にもつような重い意味で使われているのではない。」(10) この語は、六朝時代から用いられるが、唐詩においても、初唐以来多用される俗語の一つである。(11)

我が国では、文章であるが、早く空海に用例がある。

世上強鎮其如レ妣、人間何物応二常存一（孝子為二先妣周忌一図二写供二養両部曼荼羅大日経一講説表白文、『続性霊集補闕鈔』巻八）

『田氏家集』『菅家文草』に次の例がある。

何物寂寥相待見、香爐煙与二水瓶花一（送二禅師還レ山、『田氏家集』巻上）

一年何物始終来、請見寒中有二早梅一（晩冬過二文郎中一翫二庭前早梅一、『菅家文草』巻一）

子孫何物遺、衣食何価充（舟中行事、『菅家文草』巻三）

以上いずれも、吉川氏の指摘のごとく、「なに」と訓まなければならない。

底

『詩語解』巻上に、「甚」とともに挙げ、「俱俚語、何也」という。「なに」である。本朝の詩では、以下にあげるように、「縁底」（なぜ、どうして）の形で用いられるのがほとんどであるが、その中国詩の例は、『詩詞曲語辞匯釈』にあげる、王維の「愚公谷」の

縁底名二愚谷一、都由二愚所一成

がある。

我が国では、嶋田忠臣の詩に用いられたのが初例である。「同二菅侍郎酔中脱レ衣贈二裴大使一」（『田氏家集』巻中）に、

此物呈レ君縁底事、他時引レ領暗愁生

と見える。以後、平安中期以降の詩人に愛用される。

詩情縁底大蒸仍（太丞）、蓮府秋池浮レ月澄（左相府東三条第同賦二池水浮二明月一、『江吏部集』巻上）

なお、大江匡衡は、別の場でこの句と酷似した句を作っているが、そこでは、

詩情何事太丞仍、為レ是郎潜不レ得レ昇（李部大卿述二沈滞懐一忝賜二玉章……、巻中）

と、「縁底」に代えて「何事」の語を措いている。

多年稽古属二儒業一、縁底此時不二泰平一（一条天皇、書中有二往事一、『本朝麗藻』巻下）

閤東陪レ宴翫二清影一、縁底遠尋庾亮楼（藤原茂明、賦月、『本朝無題詩』巻二）

本自此身無二定体一浮雲縁底慕二浮名一（藤原通憲、閑中独吟、『本朝無題詩』巻五）

縁底別二憂苦一奚因取二楷模一（藤原敦光、初冬述懐百韻、『本朝続文粋』巻一）

縁底愁二病蚕一、誰敢食二蹲鴟一（大江匡房、参安楽寺詩、『本朝続文粋』巻一）

秋風縁底先二秋光一扇裡報来断二感腸一（藤原憲房、扇裡有二秋風一、『天喜四年殿上詩合』）

事須

先に「都盧」の語を持つことを指摘した菅原道真の「鴻臚贈答詩序」（『菅家文草』巻七）には、もう一つ俗語が用いられている。

余与二郎中一相議、裴大使七歩之才也。他席贈遺、疑在二宿構一。事須下別預二宴席一、各竭二鄙懐一、面対之外、不中更作中詩也。

圏点を付した「事須」について、日本古典文学大系本には次の注が付されている。

入矢氏云、事須二字、見二于韓愈・白居易文并敦煌変文一。即与二是須一同。事是並接頭語。

中国学の入矢義高氏の示教として、この「事」は接頭語で、下の「須」を強調するためのものであることが注意されている。従って、訓読するときも、二字一語として「事須」で「すべからく」と読むことになる。入矢氏は韓愈・白居易の文章、敦煌変文にその用例のあることを指摘しておられるが、塩見氏の「唐詩俗語新考(三)」[13]には、唐詩及び『遊仙窟』の例もあげられている。

本朝の詩文では、道真に先立って、塩見氏の指摘があるが、空海の『文鏡秘府論』に見える。ここには、その別の例をあげよう。

若五字並輕、則脱略無下所二止泊一処上。若五字並重、則文章暗濁。事須二輕重相間一、仍須二以レ声律一之。(南巻、論文意)

凡一句五言之中而論二蜂腰一、則初腰、事須二急避一之。(西巻、文二十八種病)

詩では『田氏家集』に二例がある。

百薬就レ中多二効力一、事須二嗜一菊得一如レ椿(失題、巻上)

軟脚当レ帰雲洞裏、事須二万歳用二仙羞一(九日侍二宴冷然院一、各賦二山人採薬一、巻上)

一他

動詞に連接して口語的語彙を作る一連の接尾語がある。「忘却」の「却」、「記取」の「取」などである。これらのうち、殺、得、取、却、来についてはすでに小島憲之氏に論及がある。[14] ほかに「着(著)」があるが、これは見やすい語であるから、いまは取り上げない。ここに取り上げるのは「他」である。

接尾語としての「他」については諸書に言及がほとんど見られない。管見で見いだしたのは、志村良治『中国中世語法史研究』の、「『他』にはなお動詞にそい無関心の気持を伝える独特の機能がある」[15]という言及であった。そこで例として挙げられているのは、『遊仙窟』の

今朝并復随他弄

王維の「与二盧員外象一過二崔処士興宗林亭一」の

科頭箕踞長松下、白眼看他世上人

である。

なお、『詩語解』に「他」に「彼」の意があるとして、その例にこの王維の詩を用いて、「白眼にして他の世上の人を看る」と読んでいる。「他」に「彼」の意味があるというのはその通りであるが、王維の詩をそう解するのは誤りであろう。「無関心の気持ちを伝える」というのは、果たしてそうか、疑問にも思うが、やはり動詞に付く接尾語と見るべきである。

この接尾語として用いられた「他」が、嶋田忠臣の詩に二例見いだされる。「看二侍中局壁頭挿二紙鳶一呈二諸同志一」(『田氏家集』巻上)、タコという珍しい題材を詠んだ詩に、

了得行蔵能在レ我、憐他飛伏必依レ人

がある。そうしてこの場合、「憐他」が、やはり口語的語彙を作る「得」を添えた「了得」と対語をなしていることが、「他」を接尾辞と考えるべき、見やすい証拠である。

もう一例は、「暮春宴二菅尚書亭一同賦二掃レ庭花自落一」(巻下)の

清昼憐看遅日暮、恨他乗レ醉踏レ花還

である。

なお、『扶桑集』巻七所収、惟良春道の「野副使卓世之工文者也」云々という長い詩題の詩に、

看他韶顥苦相交、毀誉随レ心変二羽毛一

の一聯がある。ここに見える「他」について、小島憲之氏は、現代語の「那」「那箇」に当たるとして、上句を「他の諂驕を看るに相交ることに苦しむ」と読んでおられるが[16]、上述のように、平安朝詩に接尾語としての「他」が存在することを考慮すると、この「看他」もそう理解することもできるであろう。ただし、いまは確かにそうだと主張する自信がないが、その可能性を指摘しておきたい。

このような接尾語としての「他」ということから、「任他」「従他」に思い至る。この二語は従来ともに「サモアラバアレ」と訓みならわされてきている。たとえば『文語解』巻四では、他の「従教」「任従」「遮莫」など十三語とともにあげて、

此皆俗語、詩語ニ用ユ、ソノ義ミナ同ジ、俚語ノカマハヌナリ。

と説明する。「任他」「従他」は固定化して熟語となっているが、語構成を考えてみると、「任」「従」はともに「ゆるす」「まかせる」「自由にさせる」という意で、それに強意を表わす、あるいはこの場合にこそ、志村氏のいわれる「動詞にそい無関心の気持を伝える独特の機能」が妥当すると思われるが、その「他」が付接したものであろう。すなわち、「任他」「従他」もやはり接尾語「他」を持つ俗語ということになる。

『詩詞曲語辞匯釈』(巻一)には「従他」の例として、李白の「白頭吟」の、

莫レ捲二龍鬚席一、従他生二網糸一

があげられている[17]。他に、塩見氏の指摘を借用すると、次の例がある。

無レ情亦任他春去、不レ醉争銷二得昼長一(白居易、早夏暁興贈二夢得一)

任他名利客、車馬鬧二康荘一(殷堯藩、寄二許渾秀才一)

従他後人見、境趣誰為レ幽(李頻、戯贈詩)

本朝では、まず「任他」は『菅家文草』に二例がある。

淼淼任他蹤二北海一、皤皤定是養二東膠一(和二大使交字之作一、巻五)

幸被二君臣交レ畝種一、任他意気満園残(九月尽日題二残菊一、巻六)

「従他」は『田氏家集』巻上、「病後閑座偶吟所懐」に、

従他軟脚難二行歩一、只幸凝神不二坐馳一

やや時代が下って、『本朝麗藻』巻下の一条天皇、「瑶琴治世音」に、

従他楽府清弦上、至徳深仁幾聖朝

と見える。以下の挙例は省略するが、「任他」は、同じ意味の語「遮莫」とともに、平安後期には多用されるに至る。

(注)

(1) 『国風暗黒時代の文学』中(中)、『古今集以前』、「白詩の影」(『谷山茂教授退職記念国文学論集』)など。

(2) 「語の性格—外来の「俗語」を中心として—」(『上代の文学と言語』)。

(3) 松浦友久「不分瓊瑤屑・来霑旅客巾—唐代俗語と平安朝の詩人—」(『漢文学研究』11号)。川口久雄氏による日本古典文学大系『菅家文草菅家後集』の頭注、補注における指摘。金原理「『軟脚』考」(『平安朝漢詩文の研究』)、なおこの語については『敦煌変文字義通釈』に論及がある。

(4) 小島憲之「漢語享受の問題に関して—「万葉語」の場合—」(『高野山大学国語国文』3号)。

(5) 杜甫のこの句の口語性を論じたものに、松浦友久「耶娘妻子走相送—唐詩の白話的表現と厭戦詩の発想—」(『詩語の諸相』)がある。

(6) 日本古典文学大系本補注。

(7) 「唐詩俗語新考(四)」(『文化紀要』(弘前大学教養部) 19号)。

(8) 我が国の詩文では「都慮」と表記される場合が多い。「文徳実録序」も「慮」に作る何本かがあり、「参安楽寺詩」も「慮」とする本がある（ともに国史大系本頭注による）。一応は『遊仙窟』の例について豊田穣氏が処理されたように、「盧の訛であろう」と考えられるが（「唐詩俗語攷」『唐詩研究』）、接尾語でもあり、なお考えるべき問題のように思われる。

(9) 塩見邦彦「唐詩俗語新考」（『立命館文学』430 431 432合併号）。

(10) 「六朝助字小記」（『中国散文論』）。

(11) 塩見邦彦「唐詩俗語新考（二）」（『文化紀要』（弘前大学教養部）17号）

(12) 傍記は祐徳神社中川文庫本、山口県立図書館本の本文。

(13) 『文化紀要』（弘前大学教養部）18号。

(14) 注1に同じ。

(15) 同書一〇〇ページ。

(16) 『国風暗黒時代の文学』中（上）六六九ページ。

(17) 注9に同じ。